

## UDL クライテリア (UDL Reporting Criteria)

### 作成者 (UDL-IRN 研究委員会 WG (\*\*委員長))

1. Kavita Rao, University of Hawaii, Associate Professor\*\*
2. Sean J. Smith, University of Kansas, Professor\*\*
3. Dave Edyburn, University of Central Florida, Associate Dean of Research
4. Christine Grima-Farrell, University of New South Wales, Lecturer, Leader of Special Education Services
5. George Van Horn, Bartholomew Consolidated School Corporation, Director of Special Services
6. Shira Yalon-Chamovitz, Ono Academic College, Dean of Students

### 要旨

学びのユニバーサルデザイン (Universal Design for Learning: UDL) は、教育学に基づくフレームワークであり、授業に潜む学びのバリアを減らし、学習者の多様性に対応するために用いられる。UDL に基づく実践を報告するためのガイドラインがあれば、UDL フレームワークを教育環境にどのように適用したのかを説明するのに役立つ。UDL-IRN 研究委員会 WG は、2017 年に対面ならびにオンライン会議を数回開催し、UDL クライテリアの草案を作成した。このクライテリアは、UDL の実践について報告しようとする研究者と実践者のためのガイドラインである。本稿では、2017-2018 年に本ワーキンググループが作成した UDL クライテリアを示す。

### 経緯

2017 年 3 月、フロリダ州オーランドで開催された UDL-IRN Summit プレカンファレンスにおいて、UDL の操作的定義および運用を検討するために UDL-IRN 研究委員会 WG が召集された。WG では、「UDL である」ことの基準を定める必要性が確認された。つまり、その実践や介入が UDL に基づくものであることを説明するためには、どのように UDL を適用し、UDL のどの要素を用いたのかに関する基本情報の報告がなされるべきであると結論づけられたのである。

報告すべき基本情報は、UDL を詳しく報告する場合の推奨事項 (Rao, Ok, & Bryant, 2014; Ok, Rao, Bryant, & McDougall, 2016) を参考に検討された。UDL クライテリアは、どのように UDL を用いたかを説明する際のガイドラインとなるだけではない。UDL に基づく実践や介入をデザインする際の指針としても活用することができる。例えば、UDL 適用に不可欠な要素を最初から確実に取り入れることにつながる。

UDL クライテリアを設定した理由は以下の通りである。

- ・「UDL である」ことを示すときに、UDL に基づくデザイン、UDL の実施、UDL の適用に関して何を報告すべきであるかの基準を定める。
- ・UDL の研究と実践を行う多様な人たちに対して、UDL に基づく実践と介入のデザイン、実施においてどのように UDL を適用したかを報告する際の基準を示す。

### UDL クライテリアの作成

2017-2018 年、オンライン会議を行い、クライテリアを検討し、その内容を定めた。作成に際して考

慮したのは、健康分野と教育分野において様々な目的に利用できるようにすることであった。Booth(2006)は、健康テクノロジーアセスメントおよびこの分野の組織的レビューを行うための Reporting Literature Searches (STARLITE)の基準について述べている。2009年に作成された The Preferred Reporting Items for Systematic Reviews and Meta-Analyses (PRISMA)は、あらゆる分野の組織的レビューとメタ分析を報告する際のミニマムの基準である。教育分野では、Council for Exceptional Children (CEC)(2014)、What Works Clearinghouse (WWC) (2014)、Gersten et al. (2005)、Horner et al. (2005)などの質の指標 (quality indicators) が、研究の発展と報告に貢献している。

WGで合意形成されたUDLクライテリアを以下に示す。

- a) UDL適用に必須の要素を定める。(例 計画・デザイン段階でのUDLの検討のされ方、用いたUDLガイドライン/チェックポイント)
- b) UDL適用に必須の要素を説明するためにUDLガイドラインを用いるが、標準的なUDLの適用方法を示すわけではない。
- c) UDLの重要な要素を明確に報告できるようにする。

UDLクリアテリアは「質の指標」ではないこと、UDLの適用の仕方や研究の質を評価するためのものではないことが、WGの一致見解である。

本稿では、UDL-IRN研究委員会WGが作成したUDLクライテリアを示す。これらは最初の草案であり、UDLの研究者と実践者が使用し、検証していくものである。

UDLクライテリアは以下の3つの特徴を備えている。

### 1. シンプル

UDLクライテリアが確実に使われるよう、3つの領域を厳選し、各領域に含める内容も3つまでとした。

### 2. 必要なことだけ

UDLクライテリアは、UDLであることを証明する際に、含まれているはずの必須の要素に焦点化されている。UDLクライテリアは、UDLに不可欠な要素(バリアの除去、プロアクティブなデザイン、ガイドライン/チェックポイントの適用)が含まれているかどうかをしっかりと見ることができるようにするものである。クライテリアを不可欠な要素に焦点化することで、UDLの適用を制限したり、標準的な適用の仕方を示したりすることを回避できる。つまり、研究者と実践家はそれぞれの実践と介入に合わせた多様で柔軟なやり方でUDLフレームワークを用いることが可能となる。

### 3. 評価基準ではない

UDLクライテリアは、ある要素の有無をチェックするためのものであり、UDLとして報告するときには不可欠な要素を示してくれる。研究を評価するためにUDLクライテリアを使う場合、UDLの質やUDL適用に関わる他の側面を重視したいこともあるだろう。例えば、学習者中心の実践がされているかどうか、インクルーシブな環境でどのようにUDLを用いるか、特定の障害のある学習者に対してどのようにUDLを用いるか、学習のエキスパートとはどのようなものかなどについてである。これらの評価は、UDLの必須要素の有無をみるというクライテリアの基本的な目的を超えているので、メモ欄に記すとよい。

## UDL クライテリア

領域と内容	記述の有無	メモ欄
<b>1 学習者の多様性と学習環境</b> 学習者の多様性に応じ、全ての学習者の支えとなる学習環境をデザインするための指針を UDL から得ることができる。 UDL の使用に関わる学習者と環境についての情報である。		
<b>a)参加者</b> [児童生徒] 学習者の多様性について以下のことを記述する。 ・参加者 [児童生徒] 全体の多様性 ・特定の参加者 [児童生徒] の特徴 (障害のある児童生徒や言葉の遅れのある学習者の読みスキル、IEP の目標、障害に関する情報など)		
<b>b)設定</b> 実践/介入環境 (学級、学年、学校種) を記述する。		
<b>2 プロアクティブで意図的なデザイン</b> UDL に不可欠な要素は、プロアクティブで意図的なカリキュラム、指導環境、教育環境のデザインである。デザイン段階における UDL の適用に関わるものである。		
<b>a)バリアへの対応/アクセスの向上</b> 以下のことを記述する。 ・実践や介入において除去・軽減しようとしている困難やバリア** ・UDL で解決しようとしているアクセスの問題 環境、カリキュラム、指導のバリアとこれらへのアクセスなどを書く。 <small>**バリア、アクセスという用語を使わなくても良い。ニーズ、困難や困難などを意味する他の用語もこの基準を満たす。</small>		
<b>b)多様性への対応</b> 多様性に応じるために意図的にデザインしたことを記述する。実践/介入における柔軟性、選択、取り組みなど。		
<b>c)用いた UDL ガイドライン/チェックポイント</b> UDL の 9 つのガイドライン、31 個のチェックポイントのどれをどのように実践/介入に用いているかについて詳しく記述する。UDL ガイドラインとチェックポイントは目標、評価、方法、教材にどのように適用されているかなど。		
<b>3 実践と成果</b> UDL に基づく実践がどのように実施され、どのような成果が得られたのかについての情報である。		
<b>a)実践/介入の実施</b> UDL の実践や介入がどのように実施されたのかを記述する。UDL に基づく実践と介入における UDL 要素に焦点を当てて書く (2c に記したことを UDL の要素に対応させて書くこと)。		
<b>b)UDL に関わる成果/結果</b> 介入の全体的な成果だけでなく、全ての学習者および特定の学習者 (1b) の成果に、どの UDL 要素が関わっているのかを記述する。(研究の目的/リサーチクエスチョンに合わせて、UDL フレームワークを含めて書く。)		
<b>c)示唆</b> 実践と介入の UDL 要素に関わる成果/結果が、何を示唆するのかを記述する。		

Recommended citation:

Rao, K., Smith, S.J., Edyburn, D., Grima-Farrell, C., Van Horn, G., Yalom-Chamowitz, S. (2018). UDL Reporting Criteria. Developed by a working group of the Universal Design for Learning Implementation and Research (UDL-IRN) Research Committee. Retrieved from <https://udl-irn.org/udl-reporting-criteria/>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-ShareAlike 4.0 International License.